

おひざのうえで 2024④

(副園長の子育て応援通信)

「想像力」

せんりひじり幼稚園

副園長 安達かえで



この夏はどのようにお過ごしでしたか。

毎日、災害級の暑さでしたね。子どもをどこかに連れて行こうにも、暑すぎて困ったのではないのでしょうか。

私は、今年も先生たちと研究会や学会に参加して学びを深め、多くの刺激をもらいました。

また、孫たちと一緒に総勢10人で八ヶ岳の方に旅行にいきました。東京方面からは近いので、現地集合です。夜は少し涼しい場所でしたが、昼間は日差しの厳しい毎日でした。散歩をしたり、アスレチックをしたり、プールに入ったり、クラフトをしたりと、孫中心の旅行でしたが、そこにブックカフェがあり、食事待ちの間に本を買ってプレゼントしました。

大人気のヨシタケシンスケさんの「りんごかもしれない」の絵本です。2歳から5歳の4人の孫達がいみんな引き込まれるように見てくれました。クスッと笑ったり、なるほどと思ったり、それぞれの感じ方は違うと思いますが、どんなふう感じたかなと思いながら、ページをめくりました。ちょうど5歳の孫が、自分の「やりたい」思いが強くて周りの状況との狭間で揺れ動き痙攣を起こすことが時々あったので、ヨシタケシンスケさんの「かもしれない」で広がっていく世界に触れて「これでいいんだ」「こんな考えもあるんだ」と、肯定的に笑い飛ばしてほしいと思ってプレゼントしました。

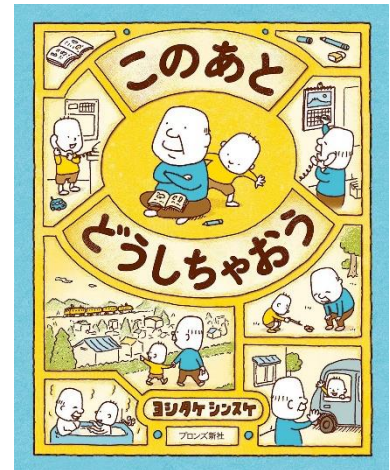


ヨシタケシンスケさんの絵本は幼稚園でも大人気。大ヒットデビュー作「りんごかもしれない」は、ご存知の方も多いかと思います。机の上に置かれたリンゴが「もしかしたら卵かもしれない」「もしかしたら宇宙から落ちた星かもしれない」。もしかしたら・・・のレベルが想像を超えていきます。「りゅうがあります」の絵本では、鼻をほじる癖がある僕は、注意されたお母さんに「ぼくのハナのおくにはスイッチがついていてこのスイッチをたくさん押すとあたまからウキウキビームがたくさん出るんだ。ちゃんと理由があるんだ」と、嘘と片付けてしまうには勿体無いほどの面

白い理由が続きます。「おしっこちょっぴりもれたろう」も大人気ですね。「もれたろう」は、ズボンをはくとわからないから「あのひともひょっとしてもれたろう？」と仲間を探しに行きますが、ほかの悩みを抱えている人ばかりで、おしっこもれたろうはほかに見つかりませんでした。家に帰るとおじいちゃんから「じつはわしもちょっぴりもれたろうなんじゃ」と言われて喜ぶというオチが待っています。ヨシタケさんの絵本は「そうきたか」と読み手の想像を超えて、クスッと笑わせてくれるものばかり。読み終わると、心が軽くなります。人間って面白いな。悩んでいることは小さな事だったのだと感じたりします。

また、「このあとどうしちやおう」の絵本では、おじいちゃんが死んでしまった後どうして欲しいかが書かれたノートを見つけます。このあとの予定は、死んだらまず「幽霊センター」に行っ

て、気が済んだらリフトに乗って天国に行きます。天国に飽きたら「生まれ変わりセンター」に行って、別のものに生まれ変わってまたこの世に戻ってくると書かれています。生まれ変わったらなりたいものが、ピザ屋さんだったり、お金持ちに飼われている猫だったり、金木犀の木だったりします。「神様センター」では神様と一緒におしゃべりしたり空を飛んだり、天国には景色のいいトイレがあったり、有名人に会えたり、みんなを見守っていく方法や、作って欲しい記念品がクスツと笑えるイラストで描かれています。おじいちゃんノートを見ていたら天国に行くのが楽しみになるほどでしたが、もしかしたら逆だったのかもしれない。おじいちゃんは寂しくて怖かったからこのノートを書いたのかもしれないと僕は考えます。「死」に向き合った絵本なのに、なぜか希望が湧いてきます。そして、ホロリとさせられました。こんな大ヒット絵本を次々書けるヨシタケさんの想像力は、果てしないですね。



7月に開催された近畿地区の研修会で、お茶の水女子大学名誉教授の内田伸子先生の「非認知能力」に関する講演会がありました。講演会后、大阪の分科会に来てくださり、亜里沙先生の発表も聞いていただきました。嬉しいことに「素晴らしい発表だからぜひ本にして出版したらどうかしら！」と勧めていただきました。娘のお茶大時代の恩師だったこともあり、話が弾み、「私の本を送るわ！」と、内田先生が娘と私の分までご著書を送っていただきました。その著書の題名がなんと「想像力」でした。冒頭に、ナチスによってアウシュビッツの強制収容所に送られ、毒ガスによって家族が次々と殺されていくという壮絶な経験をしたヴィクトール・フランクル（オーストリアの精神科医）の話が書かれていました。絶望の中で奇跡的に生き延びた彼は精神科医になり、著書に残した言葉に「厳しい収容所生活で生きる目標と希望を与えたのは、パンではなくて、人間の精神の基本的営みの「想像力」であった。」とあります。次々と同じく収容された人が亡くなっていく空間の中で、生きる意味を考え、想像をすることで、命を長らえることができたというのです。「想像力」は生活を豊かにする力だと思っていましたが、極限状態にある人々に生きる意味（レジリエンス）を与えてくれるような大きな力を持っているというのは考えたことがありませんでした。

また、人が創り出す想像世界が豊かなものか、貧弱かは、その人の経験の中身や量によって左右されることになるそうです。幼い子どもの場合は、想像の素材となるものが、心や身体を精一杯働かせて実物を扱うことによって初めて「体験」できるとあります。ごっこ遊びなどの想像遊びをしながら「体験」を「経験」へと書き換える活動により、想像力を働かせて意味の世界に生きるようになるのだそうです。

子どもは見える世界とイメージの世界を行き来しながらごっこ遊びを楽しみますよね。八ヶ岳でずっとプリンセスごっこをしていた5歳の孫たち。目に見えないものが見えるお年頃。「このドアはおもいわ。あけるのてつだって！どろぼうがおいかけてくるからはやく！！」お城の扉やパーティーのご馳走もそこにはないのにリアルなやり取り。そして泥棒役はいつもじいじをご指名です（笑）。旅行でも様々な体験をし、様々な人との対話の中で、想像を膨らませたことでしょう。

多くの体験をしながら、ヨシタケさんのような「かもしれない」世界にどっぷり浸かって、豊かな想像力で生きる力をつけていけるといいなと思いました。

さて、2学期は子どもたちがぐんと育つ時、目に見えるものも目に見えないものも、子どもたちと一緒に楽しんでいけたらいいですね。どうぞよろしくお願いいたします。